

第3部「詳報・建設トップランナーフォーラム」

# トマトプランナー

2007

## ◆トマト温室養液栽培

伸和興業（宮城県仙台市）の笠原亨氏は、同社で働く兼業農家の社員が持つ遊休田を活用し、トマト温室養液栽培で農業分野に参入したことを紹介した。

栽培作物は、品目別取扱高の高さ、単価の安定性などからトマトに決めた。栽培している大玉品種の「富丸」、中玉品種の「ケンタロー」は果実が厚いため日持ちがよく、糖度も高い。

◆野菜の生産と加工食品の開発、販売

北成建設（北海道石狩郡当別町）の工藤重成氏は、04年に農業生産法人「ノース・グランド」を設立し、パプリカ、トウモロコシなどの栽培

料が掛かりもつたいないから」と、極力直接販売している。みやぎ生協や横浜丸中青果では値決め販売を行っている。課題は、栽培技術・生産性の向上と販路の開拓で、ネット販売も視野に入れてい

### △今回紹介する企業▽

- 伸和興業（宮城県）／北成建設（北海道）／菅野組（北海道）／宇佐重機（大分県）

## 1 アグリビジネス分科会 上

を始めた。

農家の若手と協力し、農家が持つノウハウと農業土木で培った技術力・機動力を融合。産品をブランド化するなど、先進的な農業経営を目指している。

販売は「自分で販路を開拓して売る」が大前提。今後は、町内の農家と競合するのではなく、同じ目標を持って協業したいと考えている。加工食品の開発にもチャレンジしており、自前の加工工場を建設してレストランを経営。自ら生産した安全・安心の食材を顧客に提供する新しいモデルを描いている。

◆「じゅんさい」

菅野組（北海道紋別郡遠軽町）の菅野伸一氏は、健康食品ブームに着目し、じゅんさいの栽培を始めた。水質浄化

の問題はバイオマスの有効活用（炭の吸着能力）で解決し、フルーッとトマトの栽培にも取り組んだ。

苦労したのは苗の確保。北海道にも苗はあるが、品質に優れた秋田の苗を求めて秋田の大学の門をたたいた。研究

の苗を提供してもらった。市（菅原維範氏は建設業に参入したが、1990年代に「建設業は先が見えない」と、再び農業に目を向け「フラワース」を創業。サイネリア、パンジーなどの生産を始めたが、技術不足で失敗の連続だった。



ベテラン生産者に学び技術を付けて、経営を向上したと報告する宇佐重機（大分県）の菅原維範氏

無害化できない。このため光触媒を炭に塗ることで化学物質を分解・無害化することになった。

その後、地元二つの営農中の化学物質も組合を引き受け合計60種の畑に麦と大豆栽培を始めた。閑散期は、社員の有効活用、地域の雇用確保にも貢献している。

◆農業から土木建設業、そして再び農業へ挑戦（大分建設新聞社 西田博之）

もともと農家 ※毎週火・木曜に掲載

# 農家との競業から協業へ